

翻刻解題 市島春城「自叙伝材料録 四、五」

藤原 秀之

これまで三回にわたって市島春城「自叙伝材料録」を紹介してきたが、今回は全五冊のうちの残りの二冊、第四、五冊について全文の翻刻に簡単な解題を添えることとする。

第四冊の概要については第一回の解題でも触れたように「親族との関係」、「妻子の事」として、おもに春城の家である角市市島家について語っている。江戸時代後期に角市家は廻漕業を営み、一時は「千石船四十艘の多きに及」^{〔1〕}ほどの規模を誇ったが、幕末から明治にかけ急速にその財を失っていった。その経緯や、厳しい時代を支えてくれた叔父、和泉巖吉のこと、自身の結婚にいたる経緯を山田一郎、岡山兼吉ら友人たちとの関係とともに語っている。さらには春城を主として経済面で支えた市島宗家についても言及している。

第四冊までが一九一八年の二月から四月にかけて一連でなつたのに対し、「余と早稲田大学」と題された第五冊だけが遅れて十月に記されている。その理由として、いわゆる「早稲田騒動」があつたことを述べ、その収束をうけ、あらためて早稲田大学とのかかわりを記録するとあるが、実際にはわずか一丁余を記しただけで、筆は止まっている。それでは各冊について細かく見てゆくこととしよう。

『早稲田大学図書館紀要』第六十七号（二〇二〇年三月）

「自叙伝材料録」第四冊

〈表紙〉左端に外題「自叙伝資料 四」、右端に「大正七年四月中録」と墨書。ただし外題の巻数「四」についてはペン書での後補である。右端墨書の左下部に早稲田大学図書館の請求記号ラベルが貼付されている。

〈丁数〉四三丁。十四丁裏～十六裏および二一丁表～三六丁裏は白紙であり、三七丁～四十二丁は完全に切り取られている。

一九一八年（大正七）三月十九日に第三冊を書き終えた春城は、同月三十日の日誌に「閑ニ自叙伝を録す」とあることから、あまり間をあげずに第四冊（本冊）の執筆にとりかかり、翌月の十八日頃に書き上げているようである。⁽⁴⁾本冊では、すでに第三冊までに記載されている幼少期から青年期、その後の政治活動と早稲田大学との関係をあらためて振り返るような形で文章が進んでゆく。

途中、十四丁裏～十六丁裏、および二一丁表～三六丁裏が白紙であり、三七～四二丁は切り取られている。すなわち墨付部分は①一丁表～十四表、②十七丁表～二〇丁裏、③四三丁の三つの部分から構成されていることになる。そして①には「親族との関係」、②には「妻子の事」と題した小見出しを設けており、③は小見出しはないが「家祖との関係ハ追々薄らきたるもの、様に思ハる」としながらも、市島宗家の歴史について記している。以下にそれぞれの部分について詳しく見てゆくことにしよう。

〈一オ～五ウ〉

冒頭からは幼少期から青年期の出来事が綴られている。春城の家が日本でも有数の大地主である市島家の分家、角市市島家であることはこれまでたびたび述べてきたが、ここではそうした「豪家」、「富豪」の家柄であるにも関わらず、春城が「若旦那風もなく、よく訳が解る」(一オ)人物であり、「市嶋姓不似合に、よく大勢ニ通じ、話せる人である」(二ウ)背景として「戊辰戦後ハ家が不如意にな」(二オ)り、最終的には破産し、春城自身がその後始末に追われた経緯が記されている。

〈六オ―九オ〉

ここでは春城が世話になった親戚関係の記述が中心となっている。まず、少年期に近くにあった叔父の勇吾⁽⁵⁾である。勇吾は春城の父である直太郎の一番下の弟で、春城が少年時代に「不相応ニ親戚から重宝かられた」(六オ)理由を「常に家ニ在られた叔父勇吾君の鞭撻指導ニより勤勉であつた、学力があつた訳では無いが、勤勉の結果年輩不相応ニ学問が進んだ、家道が衰ひかゝつた頃であつたから、親戚も自然自分ニ注目し、此子ひとりをも兎ニ角物にしたいと云ふ情が湧いたと見へる」と、勇吾のもとでの勤勉の成果であつたとしているが、勇吾による指導が春城の学問の基礎となつていたことは本資料第一冊でも「勇吾君ニ負ふ所か少なく」く、「家庭ニ於て尤も此人の教を受けた、詩を作るにも叔父の指導を受け」た(第一冊二六ウ)と述べている。さらに春城に「終始同情を寄せられ、終生忘る可らざる扶助を恵まれた恩人」(七オ)である和泉巖吉とその岳父である和泉佳逸との関係を詳細に記している。経済的な苦境に立たされていた角市市島家、春城に対し和泉父子からは「叔父君ハ実家の宗領たる自分に対し、一層同情もあつた訳で、新潟学校に入る頃から学費を与へられ、東京ニ遊学して大学を退いて後も数年間唯たに学費を与へられたのみならず、父母を奉じて一家を立る月額までも与へられ、終にハ芝の浜松町ニ家宅を購ふて与へられ、又不時の費用をも少なからず弁せられ、高田の新聞社在留中、尚引つゝ、き入獄中も皆和泉氏の補給により、父母の生計ニ窮乏を感じし

めさることを得た」(七ウゝ八オ)と多大な援助を受けたことを具体的に述べている。

そして春城が政治活動が続けていた折に多大な援助を受けた相手として市島宗家を挙げている。春城の衆議院議員選挙出馬にあたり「一門より一人を出す榮なりとして、公然扶けられたるを發端とし、爾後幾回の選挙に宗家の力を藉ること実ニ少少で無つた」とし、「一個の分家格から云へば、実ニ過大の扶助を得た者と謂ハさるを得」ず、一九〇一年(明治三四)に春城が結果的に政治活動から身を引くきっかけとなった大病を得た時も「懇切到らざるなき手当を受け、病後も引つゝき補給を受け、幸ひニ死を免かれたのハ全く宗家の恩ニよるものである」としている(八ウゝ九オ)。

〈九オゝ十四オ〉

ここでは病後政治活動を断念した経緯とその後の早稲田大学とそれに関連した活動について書いている。

いずれも後に刊行された随筆でも触れているようなことだが、東京専門学校創立期に一時教壇にたち、病後図書館長や基金募集の場で成果を挙げていったことを簡潔に述べている。さらには図書館経営、図書館趣味との関係で国書刊行会、大日本文明協会、早稲田大学出版部とも関係があったことに触れている。そして最後に自分は「財産慾には極めて淡泊の性質で、金を溜めたり財産が欲しいなど云ふ氣ハ少壮時代から曾つて夢にも起したことが無かつた」が、妻の尽力で落合に別荘を構えた時のことに触れている。⁽⁷⁾「本宅もない頃別荘が先づ出来」(十三ウ)だがその後東五軒町に土地を買い、家を建てることとなったが、その際家蔵の大量の書画、骨董を売却した顛末に触れている。

〈十七オゝ二〇ウ〉

間に白紙を挿んでいるが、前段の新居購入の話で触れていた妻について、あらためて「妻子の事」として詳述している。春城が自身の結婚や妻の出自や性格について述べることはあまりなく、刊行された随筆を見ても直接言及している事例はほとんど見当たらない。春城の私生活におよぶ記述であり、自叙伝材料と呼ぶにふさわしい内容と言えよ

う。

妻の出自から結婚した時の二人の年齢や当時の結婚観にはじまり、亡くなった二人の友人、岡山兼吉、山田一郎から強く勧められたことなど、他では触れていないようなことにも言及している。

さらに妻の性格等について、「丈夫的剛健の質を具へて居る、物事ニテキパキして居る、婦人ニ有り勝の悲観性があるため、自分のことき楽観性のものには、これか何寄りの幸である、人に恵む同情慈愛の情ニ富むて居るが、自から奉することが甚だ薄く、若い時から老境に至る迄、儉素一点張りで、自分のために金銭を要する様なことハ一切無いと云ふてもよい、勝気の方で、何んでも自分自ら遣らねバ承知が出来ぬ、随つて微恙ニ罹つた位でハ臥して居ることも出来ず、家事の万端を一切人ニ任さぬ、調理でも裁縫でも人並以上で、天品に経済思想もある、自分ハ此点ニ最も闕けて居るから、妻の内助を得たことが少なく無い、前にも叙した通り、自分に多少の産の出来たもの主として妻の心掛に起因するのである」とほめちぎり、その理由を「自分ハ妻ニ対して始終不足ばかり云ふて居るので、妻も褒められたことかないとこぼして居るから、此場合ニ於て自ら偽らざる心事を告白して置く」のだと述べている（十九ウ～二〇ウ）。

〈四三オ～四三ウ〉

白紙と切り取りを挿んで、家の歴史全般について筆は及んでいる。ここでは「吾家の始祖ニ就ても記録の存して居るものは甚だ乏し」⁽⁸⁾とし、市島家全体としては春城が越智脩吉に筆記させた市島事歴があるくらいだと述べ、「今は仮りに切抜、全部を収め」とあるが、本冊には綴じ込まれていない。ではどこにあるかといえは、春城の貼込帖の中にそれと思われる切抜きが綴じ込まれている⁽¹⁰⁾。そこには「(前欠)等あるのみに過ぎずして其余は余か大人より聞

て記憶に存する者の二三なり、遺漏は他日の補輯を期すと云爾 左の切り抜ハ実業日本所載 明治三十六年十一月四日 故越智脩吉筆録」との記述の後に「越後市島家の来歴」(落々生) 全五回のうち第四回を欠く部分が取められている。貼込帖ではこの後に昭和六年六月の『新潟日報』、市島春城「吾家の発祥地」上下(「春城漫談」一七二、一七三回。のちに春城の随筆集『春城漫談』、『擁炉漫筆』に収載)が貼り込まれていることから、「自叙伝材料録」のこの部分も自伝関係資料としてまとめるために切り取ってこちらに収められたものだと考えられる。

「自叙伝材料録」第五冊

〈表紙〉第四冊までと異なる薄茶色の料紙を使用している。左端に外題「自伝資料」と墨書し、その下に巻数「五」をペン書で後補している。右端下部に早稲田大学図書館の請求記号ラベルが貼付されている。

〈丁数〉四九丁。ただし墨付は二丁表の三行目までで、それ以降はすべて白紙である。

冒頭に「大正七年十月中流起筆」とあることから第四冊の執筆から半年後の十月に本冊の執筆にとりかかっていることがわかる。ただ同年の日誌(「双魚堂日誌」大正七年七月〜十二月)の末尾に記されたその年の総括には「夏期の避



「市島春城貼込帖 三」
(春城資料、八三七)より

暑を廃し、閑ニ乗して自叙伝を作らんと思ひ立ち四冊を筆録したるも一半ニ過ぎず」と、第五冊執筆には言及していない。事実、本冊には簡単な前書き部分のみしか記されておらず、実質的な本文は書かれていない。

「余と早稲田大学」という内題から、本冊では早稲田大学（東京専門学校）との関係に特化してまとめる予定だったことは、おそらく間違いない。いわゆる「早稲田騒動」の混乱の後、図書館長等の校務を離れたこの時期、「早稲田大学と余との関係を叙するハ此の時尤も可なりとす、是れ余の再び筆を取る所以也」（二ウ二オ）と、早稲田との関係を記す格好の機会と考えていたにも関わらず、結局ここで筆は止まっている。この時期の日誌やその他の筆録にもその理由は記されていない。ただ「新潟新聞と北越新報の郷里の二新聞に「衝口発」や「赤裸々」、「酒前茶後録」、「意外録」等の連載を始めるなど「随筆家市島春城の名をたかめる活動は、この年から本格的に始まった」とされるように、随筆家としての活動が盛んになり、そのために過去の筆録の整理やあらたな筆録の作成もおこなっていることから、そうした活動に中心が移っていったことも、本冊の執筆を途中でやめてしまった一因と考えられよう。

ここまで市島春城の「自叙伝材料録」全五冊の翻刻をおこない、簡単な解説を記してきた。もちろんこれをもって市島春城の自伝がまとめられたとは到底言えるものではない。本資料第一冊の巻頭近くに「余の為に伝を立るものぞ、吉田震卿こそと思ひしに、これも吾れに先たち逝けり」とあるように、吉田東伍に自身の伝記編纂を托すつもりが東伍の死という思いがけぬ事態により実現しなかった。それを一つのきっかけとして春城は自らの半生をふりかえるべく本資料をまとめたものと思われる。ただ、実際には春城はこの後四半世紀近い年月を生き、その間には早稲田大学の新図書館建設のために尽力し、大隈重信の国民葬を実質的に取り仕切るなど、多方面での活動を続けている。また数多くの執筆を刊行するものこの後のことである。さらには本資料第二冊で「政治方面」について書いてはいる

が、その中で衆議院議員時代の議会活動や地元新潟での政治活動についてはほとんど触れられていない。春城の伝記を纏めようとするならば本資料に書かれていないそうした時代のことも精査したうえでまとめてゆく必要がある。そのためには春城が遺した数多くの日誌、筆録をより詳細に検討し、また春城の周辺にいた人々の言葉にも耳を傾けながら、より多角的、また客観的な調査が求められる。今回で「自叙伝材料録」の翻刻は終了するが、今後は右に書いたような「市島春城伝」をあらためてまとめたいと考えている。

注

- (1) 市島春城「郷土自慢」(『鯨肝録』、東宛書房、一九三六年)。
- (2) 一九一七年(大正六)に早稲田大学内でおこった紛争。学長である天野為之を中心とする勢力と、高田早苗、市島春城らが対立、学生、教員を巻き込み、新聞紙上でも大きく取り上げられる一大騒動となった。最終的には天野が学長を辞任して大学を去るかたちで決着するが、高田、市島も学内の要職を辞することとなった。当時学生であった尾崎士郎(一八九八—一九六四)が『人生劇場』の中で描いたことでも知られている。早稲田大学大学史編集所編『早稲田大学百年史』二(早稲田大学出版部、一九八一年)、佐藤能丸『早稲田大学騒動』(『国史大辞典』ジャパンナレッジ版)参照。
- (3) 第三冊表紙には「三月十九日録了」とあるが、日誌によれば書上げたのは翌二十日の朝のことであった。「双魚堂日誌」大正七年三月二十日条、市島春城資料 五七四。以下、早稲田大学図書館所蔵の「市島春城資料」は単に春城資料と記す。
- (4) 「双魚堂日誌」大正七年三月三十日条、同書四月十八日条。
- (5) 勇五郎。憲、字・士章、号・得所。儒学者・肥田野築邸に学び、のち奥平謙輔に認められ佐渡民政局に出仕した。市島成一編『家廟之紙碑』(継志会、一九六五年)、阪口五峯『北越詩話』(目黒甚七、一九一八—一九一九年)、村島靖雄編『越佐人名辞書』(同書刊行会、一九三九年)参照。
- (6) 巖吉もまた直太郎の弟で勇吾の兄にあたる。歌人にして勤王家であった和泉佳逸(佳一、久寛、新次郎とも)の娘と結婚し、

養子となり和泉家を継ぎ、自らも和歌をよくした。春城の妻ユキもまた佳逸の娘であることもあり、明治はじめの角市家の危難にあたり、春城たちが経済的な支援を受けたのが巖吉であった。一九〇二年没。市島春城「憶起録」(吉田文庫所蔵)、『北越詩話』、『越佐人名辞書』参照。

- (7) この別荘について春城は「落合雜記」(春城資料 六四一)と題する筆録をまとめている。そこには別荘建築にかかった費用からはじまり、一九一二年(大正元)十一月の契約から上棟式、さらには植木屋への支払いやその後の維持費用の支出が細かく記されている。そしてなによりこの資料を特徴づけているのは本資料執筆よりも後、一九二二年(大正十一年)八月の會津八一への貸し出しに関する記載である。「大正十一年八月中 會津八一別荘を貸すの記」と題した文章で、その内容を見るとまず別荘には前年から図書館関係者夫婦を留守居に住まわせていたが、八一が体調不良のため早稲田中学教頭職を降りることとなったので、家賃のかからないこの家を貸すことにしたとある。このとき春城は自家の荷物は残しておくつもりだったが、八一の諸道具があまりに多かったので、多くを本宅に移すか売却しなくてはならぬ程だったという。會津はそこを「秋艸堂」と名付けたことで知られている。

- (8) 角市家については春城の祖父、熊太郎(静修)と弟の国太郎によって「吾家之歴史」と題する家史がまとめられている(「吾家之歴史 吾家の大事紀」新潟県立図書館所蔵、「春城文庫」九)。拙稿「市島春城の生家、角市市島家の歴史について」(『早稲田大学図書館紀要』六二、二〇一五年)参照。

- (9) 『実業之日本』第六卷二一―二五(一九〇三年一〇月―十二月)に落々生の名で「越後市島家の来歴」が五回に渉って連載されている。また当時の春城の日記(「春城日記」明治三十六年八月以降)を見ると、「市島家事歴(実業之日本の原稿)ニ付、越智脩吉来訪あり」(十一月七日)、「市島家事歴之原稿を齎らし越智来訪あり」(十一月三日)との記述がある。この記事はのちに実業之日本社編刊『日本富豪の家風』のなかで「越後の大地主市島家」としてまとめられた(一九〇五年)。

- (10) 「市島春城貼込帖 三」、春城資料 八三七。

- (11) 春城日記研究会「翻刻『春城日記』二九」解題(『早稲田大学図書館紀要』六三、二〇一六年)。

自叙伝材料録 四

翻 刻

〈凡 例〉

- ・文中の旧字（異体字含む）は新字に統一した。カタカナの「ニ」については漢字「二」との判別のため半角とした。
- ・本文中の（ ）は原本のままである。
- ・文中、あきらかな誤字、当て字には傍注を加え、一部に読点を補った。
- ・各半丁の区切りはカギ括弧（ ）でくぎり、次丁の字句をその後に追いつ込みで表記した。また、表裏を（オ）（ウ）で示すこととし、一丁表Ⅱ（1オ）とした。

〈表 紙〉

大正七年四月中録

自叙伝資料 〔四〕^{〔異半〕}

〈見 返〉

「イ4 1919 754」〔鉛筆書入〕



自叙伝材料録 四（一表）

「38—9466」(ナンバリング)

〈本文〉

「176914」(1オ右上欄外ナンバリング)

自叙伝資料

親族との関係

一、豪家ニ生まれたものは設全高い教育を受けても鷹揚ニ過ぎ、世態ニ暗くて浮世の辛味がわからず、所謂執袴者流として嘲を受ける様な事のあるのが通例である、自分も素封家の出であるが、社会に投じてから、人或ハ自分の姓が越後ニ有名な富豪であるに気づき、それにしては若旦那風もなく、よく訳が解る、実に不思議だなど、云ふたものが幾人もあつた、一例を挙げると、帝大総長山川健次郎の実「(1オ)兄山川(造)將軍を訪問し、曾つて巖越鉄道⁽²⁾を論じたことかあつた、將軍は後日ある越後人ニ会した折、余の名を挙げ、あの人ハ市嶋姓不似合に、よく大勢ニ通じ、話せる人であると云ふたと云ふことを直接山川から聴えた人から耳にしたことがある、実ハ人を馬鹿にした様な話であるが、富豪家の子弟の多くが役ニ立たぬことが反面から現ハれされ居る、

一、自分も若し裕福ニ育ち、裕福ニ教育を受け、裕福な生活を継続したならば、恐らく普通の例ニ漏れず、執袴者流として嘲けられても詮方無つたであらう、然るに自分「(1ウ)ハ幼少の頃、家道尚衰へず、豪家の子として育でられたに違ないが、漸やく長して家道衰ひ、戊辰戦後ハ家が不如意になつた、併し自分か不如意を感じるまでにハ至らなかったが、当時の漢学教育ハ、所謂の硬教育で、不如意ならざる者を不如意の境遇に置き、儉素の薰陶を力め

た者であつたから、自分か裕福の家庭に居つたのは極めて幼少の折丈で、それよりは多く修業のために家ニあらず、或ハ塾舎ニ宿し、或ハ戚家に寄宿し、早くからいろいろのつらさを感したものである、マサカ苦勞人」(2才)とも云ひぬが、確かに温飽のでハ無つた、

一、自分の家が何故破産するに至つたかに就ては家史ニ譲り⁽³⁾、爰には大略を述ぶるが、大体先考の幼弱の時ニ父母か長逝せられ、祖父も其後棄館せられて、先考か家長となつて家産を料理せらるゝには年か若過ぎたのと、維新の革命が起つて家産を守ることが困難となり、公やけの事ニ負担が一時ニ嵩まつたなどが破産の原因となつて居る、つまり当時ハ保守でも動もすれバ産を害つた位である、若氣で且つ進歩的であつては勢ひ産」(2ウ)を破らざるを得ぬ、宗家ニ相当の負債があつてそれを償却するに節儉を要する所から、戊辰の乱後、下条の宅を宗家ニ提供して西条へ引き籠むことになつた、西条でハ母方の丹呉氏の分家の宅を借宅したが、余りに狭隘であつたので、それに坐敷外一二の室を増しをした、それを宗家でハ贅沢ニ失するとなしていろいろの面倒が起つた、後には西条を去つて辰田ニ引移り、養蠶などを遣つて見ても甘く行かず、爰にも永住の為に建築を遣つたので追々不如意になつた、」(3才)

一、自分ハ一家の経済には全然与らなかつた、長して大学ニ在りし頃も弟に一任して毫も与らなかつた、自分ハ父祖の産を継承せん念慮ハ毛頭なく、辰田の家も弟の名義にしてあつた、自分ハ独立で赤手空拳、世を泳ぐ積りであつたから、家の経済には触るゝ事を欲しなかつたが、扨て自分か大学の本科二年を終らんとする時分から家政に困難が生じて傍観が出来なくなり、確か本科三年の時、世故にも適せぬ自分か郷里へ帰省して愈々家を始末して、父母を東京へ同伴す」(3ウ)ることになつた、

一、自分ハ青年時代より政治的趣味を有つて居つたので、第一迂闊な学者にならんより實際家ニならんと力めた、こ

れには亡友岡山兼吉氏の薫陶ハ余程与つて居ることハ確かで、自分か常識ニ於て敢て人後ニ落ぬのは全く此の友人のお蔭であることを爰ニ告白するに躊躇セぬ、第二、實際家たらんことを欲したから、家政の整理も実験上必要と感して態々東京より家山へ馳セかへり、不束ながら其衝に當つて見た、実ハづるく構へて卒業」(4オ)まで放擲し置かは却つて意外の活路が開けたのであつたかも知れぬのであつた、第三、自分が、政治ニ志のある以上、郷国の人より他日一指でもさゝるハ困ると顧慮して、家産の整理も実ハ余リニ正直ニ過き、何人にも迷惑をかけてハならぬと奇麗ニ債務を済ましたから、誰れの憤怨も買ハぬ代りに、幾んど無一物になつて了つた、第四、自分か前途政治的生活を為すに當り、家の債務ニ累ラハされとも、又自分の行動か家ニ累を及ぼしても困ると考へて、みづから廢嫡を主張して戸籍面ハ廢嫡となつて居」(4ウ)る、第五、自分ハ今一年で大学の卒業の出来るのを實際家となつて世ニ立つには、学士の称号などハ却つて邪魔になると考へて退學した⁽⁶⁾

一、右のことく家ハ自分の学生時代ニ早く歿落したから、若し誰れも自分を扶助せず、已むなく腕一本、脛一本で、どこまでも遣つて往つたならば、苦勞も偉らかつたらうが、克己獨立の心も亦大いに起つたであらう、恐らく今日の自分より十倍もそれより以上も偉らいものとなつたに相違なかつた、然るに恩を受けて人を非難する様に當るが、」(5オ)自分ニ對して与へられた親族の扶助か、寧ろ多きに過ぎた、乃ち前には叔父和泉氏より、後には宗家より、自分の受けた扶助ハ決して學費のこととき些少のことでは無つた、これか為めに自分并ニ父母ハ窮乏を免かれ、政治生活も継続することか出来、真ニ終生忘れ難い恩人であるが、自から顧みれば此の恩惠の為めに自分の信頼心か増長し、一身の害をなして居る様に思ハる、勿論非ハ自分にあるので恩人を怨む訳で無いことハ言ふまでも無い、」(5ウ)

一、自分の少年の頃ハ不相応ニ親戚から重宝かられた、其訳ハ常に家ニ在られた叔父勇吾君の鞭撻指導ニより勤勉であ

つた、学力があつた訳でハ無いが、勤勉の結果年輩不相応ニ學問か進んだ、家道が衰ひか、つた頃であつたから、親戚も自然自分ニ注目し、此子ひとりゝを兎ニ角物にしたいと云ふ情か湧いたと見へる、自分か水原の弘業館ニ寄宿して星野豊城先生ニ學んで居る頃ハ、家ハ既ニ西条ニ引越した後であつたが、水原には分家の叔父ニ当る人の家かあつた、自分ハ月に二三度ハ訪問したが、叔父ハいつもお前の評判」(6才) かよいとか、先生がお前を褒めて居られたとか云ふて喜ばれた、又其後、漢學を廢して新潟學校ニ英學を學むて居る頃には、成績^{成蹟}が良かつたので、新潟の親戚、栗林重三郎がひどく頼もしがられ、東京ニ出て親戚熊倉氏ニ寄宿しなから英語學校、それより進むて開成學校ニ入つた頃には、熊倉氏も自分の学力の優等なるを認めて駈ぬけ開成學校の入学試験ニ応せよと慫慂せられ、一級飛び越して冒險的の試験を受けたが、幸に及第したので、一層自分を珍重せられたこともある、」(6才)

一、併し自分に終始同情を寄せられ、終生忘る可らざる扶助を恵まれた恩人ハ和泉の叔父である、和泉の叔父の岳父に當る佳一と云ふ人ハ妻の父で自分にも義父に當る人であるが、少年の頃、親戚真嶋氏^{マキマツ}ニ法事があつて行つて居ると佳一君が其の親戚なる嶋見の近藤代治と云ふ人を伴ふて來られた、此の近藤^{マキマツ}と云ふ人は、自分よりも年長で矢張り談書人であつたが、佳一君ハ曾て自分の咄場を見られたことがあつて、いたく賞された、此度も年長の近藤に對し、いたく自分を称揚され、君などハ宜しく此の人ニ」(7才) 傲ふべし、など云ハれ、自分ハ却つて赧愧したこともあつた、叔父君ハ実家の宗領たる自分に對し、一層同情もあつた訳で、新潟學校に入る頃から學費を与へられ、東京ニ遊學して大學を退いて後も數年間唯だに學費を与へられたのみならず、父母を奉じて一家を立る月額までも与へられ、終にハ芝の浜松町ニ家宅を購ふて与へられ、又不時の費用をも少なからず弁せられ、高田の新聞社在留中、尚引つ、き入獄中も皆和泉氏の補給により、父母」(7才)の生計ニ窮乏を感じしめざることを得た、和泉家父子の自分并ニ自分の家ニ對する同情ハ余り世間に例のない位なものである、叔父の念願ハ自分を飽まで護り立て、立派

に世間ニ立せて、家声を揚げさせたい一念^三出たことハ言ふ迄もない、然るにそれニ辜^ニ買^ニして自分の碌々たるに想ひ到れば、慙死尚足らざるを覚ゆる位である、

一、自分が政治生活の歩を進めて郷里の新聞^ニ筆^ニを執り、名声漸やく郷閭^ニ流传するに迫り、或る人ハ自分のために斡旋し、宗家との関係の復旧を図つた、その頃徳次郎君の大人尚存命^一（8才）中であつたが、此の斡旋ハ意外^ニ早く埒が明いた、宗家の老人の云ハるゝには、謙吉には毫も不都合ハ無い、随つて本末の関係を復旧するも異議なしとありて、自分ハこゝに始めて宗家を訪ふて老人夫婦并^ニ当主夫婦^ニ面し、自後ハ頻繁^ニ出入し、一時ハ宗家の家政にも干与した、^⑦

一、余カ政治生活^ニ宗家の扶助を得たことハ実^ニ多大のものである、明治廿三年初期の議會に選挙を争ふ場合のとき、一門より一人を出すを榮なりとして、公然扶けられたるを發端とし、爾後幾回の選挙に宗家の力を」（8ウ）藉ること実^ニ小少で無つた、啻たに政治上で援けられたばかりで無く、私の上に於ても折に触れて其扶助を受けたことも亦決して小なりとハ云へぬ、一個の分家格から云へバ、実^ニ過大の扶助を得た者と謂ハざるを得ぬ、宗家^ニ於てハ、自分を常に破格^ニ取扱^ニられた、新渴^ニ大患^ニ罹つた時の如き、懇切到らざるなき手当を受け、病後も引つゝき補給を受け、幸ひ^ニ死を免かれたのハ全く宗家の恩^ニによるものである、以上四月十三日筆

一、振り返つて四十歳頃迄の来路を考へて見ると、親族の力^ニ依頼^ニしたことか甚だ多く、実^ニ忤^{（世規）}（9才）忤たらざるを得ぬ、自分が人^ニ依頼^ニせぬことになつたのは政治生活を磨めてからである、乃ち大患後からである、自分の一生ハ大患の前^ニ劃然^{（斷）}たる相違があることハ後^ニ述ぶるが、兎^ニ角自分ハ素封家^ニ生れながら、その資産の沢に浴さなかつた、随つて自分を扶助する人も出た、扶助を受けたために依頼心を助長し、自らをスポイルした様でもある、

併し若し自分の家ニ資産があつたとすれば、どうであつたと案じて見ると、自分のことき疎慢のものは政治運動やその他で一ト溜りもなく蕩尽したに相違ない、さて蕩尽した揚句ハ恐らく親族も扶助を与」(9ウ)へなんだであらう、自分の家の破産ハ不幸にハ相違ないが、自分を教育する上にこれか寧ろ幸であつたのだ、但た破産の結果として親族を煩ハしたのは、かへすく不本意であつた、

一、政治生活を営むものは到頭台閣に列する迄行かねばならぬ、所謂る支那流の大功ハ細瑾を顧みす的の遣り口ハ、実地ニ於て免かれ難い、併し当人よりも援助者が全く溜らない、自分が政治生活を全然廃したのは、薄志弱行の様でもあるが、大患ニ罹つて活動不可能の宣告を主治医から受けたから已むなく断念したの」(10オ)だ、病余数年ハ主治医の言つたことく迎も身体ハ活動ニ堪へなかつた、亦つらく考へて見ると、自分のことき清濁併せ呑むことの出来ない性格のものが、窮極政治ニ成功するハ覚束ないと感ぜられた、いつ迄も下働きに努力した所で賽の河原の児戯も一般で、どれ丈の功か国家にあるでもない、それよりも寧ろ出来得る丈の努力を教育に尽せば、努力丈の甲斐があると感じたのが、政治を廢めて教育に身を投じた所以である、

一、自分か早稲田大学ニ関係したのは、其前身、東京専門学校（東京大学）の創立頃からである、一時ハ教鞭を執つたこと」(10ウ)もある、長く幹事の職ニ居つたこともある、併し此頃ハ学校も甚だ振ハす、自分も浮気でまだ政治に脚を投じて居つたから、余り成蹟（成績）の見るべきものハ無つた、自分が此学校ニ努力して相当の成蹟を挙げたのは病後である、先づ図書館の経営から始めて、追々要職ニ立ち、学長を助けて大学組織となすにつき基金の募集や一般経営ニ力を注いだ、今度ハ浮気の沙汰でなかつたから着々成蹟の見るべきものがあつた、年の功でもあらうけれど、全く政治断念の結果、浮躁の氣か転して沈着となつた為めである、

一、病後十年の間医戒を厳守して喫烟も酒」(11オ)も廢した、これか自分の健康に大なる効果があつたのでなく、

酒樓にも縁遠くなつたために無益の浪費も漸やく減した、実ハ酒を廃したお蔭と云はんより政治を廃したお蔭である、政治的運動ほど無駄金の要るものハ無い、設令ひ病後酒を廃しても、尚政治運動を繼續して居つたならば不相当浪費が累を爲したに相違ない、併し自分の境遇ハ不如意勝で、家計も不充分であつたが、一方ニ節する所があつたから敢て借錢する程の事も無くて済んだ、

一、自分が図書館経営ニ与り、益々図書趣味を感じた結果として種々の出版経営ニ与る」(11ウ) ことになつた、国書刊行会を起したのも、早稲田の出版部の衝に當ることになつたのも、文明協会の経営ニ与ることになつたのも、亦すべて是等ニ努力して相当の成績を挙ぐることの出来たのも、皆病後のことであつて、漸やく落付いたジミなる仕事に親しむ様になつた、

一、自分ハ少壮の頃、酒以外に興味の娯樂を有たなかつた、然るに十年酒を廃して見ると寂寥を感ずること甚しく、酒の趣味に代ハるものか是非必要となつて、いろ／＼の趣味を覚ゆることになつた、其の委曲ハ自」(12オ) 叙伝の趣味方面と題する項ニ書いてあるからこゝにハ略するが、書画や骨董やその他の趣味の起つたのも、又いろ／＼の物を蒐集したのも皆な病後のことであつて、家計ニ多少の余地が存した結果である、

一、自分の大隈侯を識るハ書生時代からであるが、侯に頻々と親炙し、侯と旅行を共にしたのは早稲田大学の経営から生じた事で、侯ハ常に逆境に立たれ、台閣ニ立つ代りに野に在つて社会教育ニ努力され、早稲田大学のために一方ならぬ力を致された、而して常に其の左右ニ椅し、形影相隨ふこと」(12ウ) き趣をなして居つたのは自分で、侯の偉大の人格と雄渾の気魄ニ間断なく薰陶を受け、一種他ニ學び難い気格と品性を養ふことの出来たのも、自分の政治期に於て、なく、寧ろ病後政治を廢してからの事である、

一、自分ハ全体財産慾には極めて淡泊の性質で、金を溜めたり財産が欲しいなど云ふ氣ハ少壮時代から曾つて夢にも

起したことが無かつた、而るに大患ニ懼り幸いに死を免かれてみると、身後の図を為す必要を覺つたが、矢張り財産慾が薄く、どうもこれニ（13オ）熱する氣が起らぬ、而るに幾許資産の出来たのは偶然である、偶然と云はんより寧ろ妻の力とも云ふべきであらう、落合の村ニ最初妻が猫額大の土地を買入れたのかそもくの始めて、それから追々に拡大して終には小屋を建て、三千坪ばかりの土地に多少の経営をなして、本宅も無い頃別荘の方が先づ出来、それから昨大正六年五月、現在の東五軒町の土地家屋を購ひ、これと二室を新築した、此の新居を購ふことになつたのも内子の切なる望に出たので、三萬円に近き金の要る買物には実は」（13ウ）窮したが、落合の土地が幾許の借金を担いて居る上にまた借金もなり兼て、已むなく年来苦心して蒐集した書画や骨董の大半を売つてこれニ易へた、幸に物価の暴騰した折柄、自分の蔵什が三萬円以上に売れたと云ふのは予期外の事であつた、自分に聊かの資産の出来たのは右の次第で、矢張り病後の事ニ属する、若し大患の時ニ逝つたならば、多くの借財を残して、いかに子孫を累したことであらう、

（四月十四日録）（14オ）

（以下、14ウ～16ウ白紙）

妻子の事

一、妻ハ和泉佳一翁の第九女である、その長女ハ叔父巖吉君の配偶で、叔父ハ養子に行かれたので和泉佳一君には男子が無つた、妻ハ自分より六歳違で、自分が廿三歳の時、妻ハ十七歳で婚儀を結んだ、

一、越後ハ早婚の慣習があつて、豪家には男子が十七歳位になるとハヤ婚札沙汰が起る、自分に対しては家には内々いろくの工風もあつたらしかつたが、自分ハ早婚を好まなかつた、且つ今時のことく西洋風に相思の女を婦とすると云ふことときハイカラな真似も」（17オ）思むだが、同時に両親より押し当てかハるのを何んでも構ハぬとする

ことも好まなかつた、

一、縁組と云ふものは、家と家とが親密の關係を有して居ることが大切な要件である、自分ハ若い頃に個様に考へた、而して今も同様に考へて居る、此見地からすると、自分の妻ハどうしても和泉家から來らざるを得ぬのであつた、自分ハ妻の父翁より愛せられ、自分も幼少ながらこの人を畏敬した、叔父巖吉君の代になつてからハ、全く和泉家ニ頼つて教育を」(17ウ) 受けた様のもので、哥慈ハ吾子のことく自分を愛せられた、此の恩愛の關係から、婦を此家より迎へるのは自然である、

一、併し、哥慈は毛頭自分に己か家の女を娶ハすなどの念慮ハ無つた、他日自分が大成の上ハ地位の上からも相当の家から婦を迎ふべし(華族などからと考へられて居られた様であつた)と云ふ論であつた、亡友岡山兼吉、山田一郎などハ是非和泉より貰らうべしと自分ニ熱心ニ賛成して、ある時哥慈の上京せられた時、両亡友ハ哥慈ニ強請したので、哥慈も我を折り、然らバと云ふことになつたが、両親には全く」(18オ) 没交渉で、こゝ迄進んでから、漸やく告げた位であつた、勿論異議ハ無つた、

一、両亡友が口を利えたのは、高田に往かぬ前で、高田ニ行き種々の訴訟事件が起り、入獄期が近づいた頃、哥慈が高田まで見舞旁訪ねて來られ、入獄前結婚を済ましてハどうかと云ハれたから、自分もそれニ同意して哥慈の帰郷後、自分ハ五泉ニ和泉家を訪ふて其家ニ結婚し、婦を実家ニ留めて、再び高田ニ歸り、出獄後婦を高田ニ迎へ、伴ふて東京に引上げた、

一、妻ハ和泉家の家道の衰えた頃、自分の家」(18ウ) に嫁したのであるから、家ニ在つても余り我俣を許されなかつたのが却つて自分には幸であつた、教育とても一ト通り受けたに過ぎなかつた、勿論當時ハ小学以上女子の入るべき高等の学校などハ無かつた、自分の家ニ來てから少しく教育を与へて見ようかとも思つたが、家事教育ハ其の家

庭ニ於て充分受けて居つて、今時学校などに教ハつた者よりも寛かに優れて居つたから、自分ハそれで満足して、なまなか學問を多く遣らせるの不可を感じた、

一、妻の母ハ余の母の実家から嫁された関係もあり、家庭ハ田滿であつた、自分か自から廢嫡」(19オ)を企てたことハ前に叙したが、扱て父の家を嗣くものとして和泉の哥慈の三男、喜代四を貰ひ受け、それも漸やく三長して東京に上つて来た、其後和泉家も追々不如意となり、次男文三を引取り、自分の手元で教育することにもなつたので、妻か和泉の出であることが、此等のことにもよい都合であつた、

一、妻ハ父翁の性を受けたものと見えて、丈夫的剛健の質を具へて居る、物事ニテキパキして居る、婦人ニ有り勝の悲觀性を有たぬ、自分のことき樂觀性のものには、これか何寄りの幸である、人に恵む同情慈愛の情」(19ウ)富むて居るが、自から奉することが甚た薄く、若い時から老境に至る迄、儉素一点張りで、自分のために金錢を要する様なことハ一切無いと云ふてもよい、勝氣の方で、何んでも自分自ら遣らねバ承知が出来ぬ、随つて微恙ニ罹つた位でハ臥して居ることも出来ず、家事の万端を一切人ニ任さぬ、調理でも裁縫でも人並以上で、天品に經濟思想もある、自分ハ此点ニ最も闕けて居るから、妻の内助を得たことが少なく無い、前にも叙した通り、自分に多少の産の出来たもの主として妻の心掛に起因するのである、」(20オ)

一、妻ハ多くの子女を儲けたが、こゝに亦其の勝氣である特性をあらハして居る、懷妊しても分娩まで何人も様子か一切分らぬ、分娩の時ニ追んでも産婆を煩ハさぬことすらあつた、実家には姉の子か沢山あつたために、自然保母風の心得もあつて、兒女の世話も遺憾なく届いた、自分ハ妻ニ対して始終不足ばかり云ふて居るので、妻も褒められたことかないとこぼして居るから、此場合ニ於て自ら偽らざる心事を告白して置く、

一、

（以下余白）（20ウ）

（21オ～36ウ白紙）

（37～42丁、切り取り）

家祖との関係ハ追々薄らきたるもの、様に思ハる、

吾家の始祖ニ就ても記録の存して居るものは甚だ乏しい、唯た岱海翁の書かれた父祖の碑文ニいくらか録されてある事と、先考が記憶され居ること位さへ材料ハ無い、曾つて明治三十六年十一月中、実業之日本社の雑誌ニ市嶋家の事歴を載せたいと需められ、今ハ故人となつた越智脩吉に筆を取らせ、自分の知る限りを書かせて二三号ニ涉り掲載せしめたことがある、これか」（43オ）市嶋家の唯一の家史とも謂ふべきもので、その他には宗家にも自分の家にもこれより以上のものは無い、一二の雑録ニ同じ様なことを出したこともあるが、皆なこれニ源流して居る、自叙伝には不必要の事が甚だ多く、財産ニ関する数字のとき、執筆当時の調べに拠り、今ハ相違して居ること勿論であるが、今は仮りに切抜、全部を収め、自叙伝を作る際には取捨剪裁せんことを庶幾する、

（以下余白）（43ウ）

自叙伝材料録 五

〈表紙〉

自伝資料「五」

〔原筆〕

〈見返〉

「イ 4 1919 755」(鉛筆書入)

「38—9467」(ナンバリング)

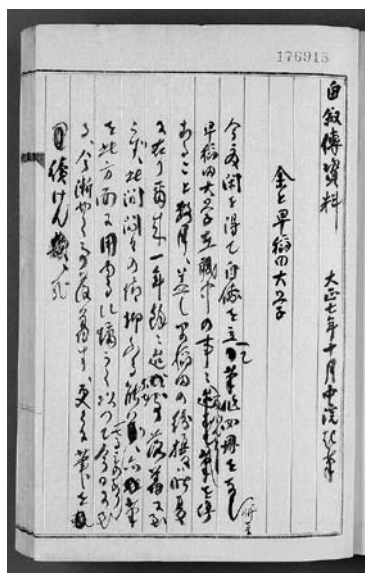
〈本文〉

「176915」(1オ右上欄外ナンバリング)

自叙伝資料

大正七年十月中浣起筆

余と早稲田大学



自叙伝材料録 五 (一表)

今度閑を得て、自伝を立て筆作四冊をなし、将さに早稲田大学在職中の事ニ及ばんとし筆を停むること数月、蓋し早稲田の紛擾ハ昨夏に在り、爾来一年余ニ迫、事落着に至らず、此間悶々の情抑ふる能ハさるものあり、亦筆を此方面に用ゆるに慵うく以つて今日に至る、今漸やく事落着す、更らに筆を続けん哉、」(1オ)

余の早稲田大学に關係すること三十有余年、図らざりき晩年紛擾渦中の人とならんとハ、然れとも静かに惟ふに、これ実ハ世に有触れたる反動に過ぎず、斯のとき反動を生したるハ、偶々余が早稲田大学に關係するの長く、且つ深かりしことを意味するもの也、余ハ紛擾の際、他の同僚と共に終身維持員を辞したり、此頃解決を告げ、余又終身維持員ニ指名されたるも固辞したり、然れとも名管理事として今尚名を校籍に留む、いまだ学校と全然絶縁したるにあらず、然れとも現職を辞したる以上ハ爰ニ段落を尽したりと云ふて可也、早稲田大学と余との」(1ウ) 關係を叙するハ此の時尤も可なりとす、是れ余の再ひ筆を取る所以也、

大正七年十月十四日記、(以下余自)

(2才)

(以下、余白)

注

(1) 一八四五—一八九八。会津藩士として幕末を迎え、会津開城後は陸奥斗南藩(青森県)権大参事となる。廃藩後は陸軍省にはいり西南戦争に従軍。高等師範の校長、さらには貴族院議員となった。『日本人名大辞典』、JapanKnowledge 版。

(2) 巖越鉄道は今日の磐越西線(新津→郡山)に相当する鉄道路線。一八七二年(明治五)の開業以降、全国各地で官民による鉄道敷設が進み、新潟県内でも一八八六年(明治十九)の直江津→妙高間の開業により鉄道の歴史がはじまった。その後、一八九二年(明治二五)に鉄道敷設法が成立、政府主導の鉄道政策が示され、早期開業を目標とする九路線(第一期線)を中心とした官設の鉄道予定線が指定されると、全国各地でその路線や着工順序などについてさまざまな運動がおこった。その中で巖越線は一八八六年(明治十九)頃から建設運動が始まっていたが、「第一期線」には含まれていなかったため、その早期実現に向けた運動が進んでいた。一方、一八九四年(明治二七)に衆議院議員となっていた春城は、当時超党派の議員で構成されていた「鉄道同志会」の主要メンバー(一八九六年一月には同志会の「鉄道上委員」に選出されている)として活動しており、巖越鉄道についても、その路線である会津に関係の深い山川と会う機会があったのだろう。「春城日誌」明治二十九年一月十八日条(春城資料・五二四)、徳竹剛「帝国議会の開設と地域有力者 岩越線の官設第一期線上運動を事例に」(『東北文化研究室紀要』五二、二〇一一年)、新潟県編刊『新潟県のあゆみ』(『新潟県史』概説、一九九〇年)参照。

(3) 春城の角市市島家は、春城の曾祖父・三余の時代に大きく発展したが、父・直太郎の時に幕末を迎え、家産が大きく傾いた。その要因として第一に挙げられるのが周辺諸藩への貸付等である。春城が母からの聞き書きをまとめたなかに「当時(曾祖父・三余の時代)引用者注、以下同)多くの大名の台所をあづかり(中略)此の中に峯山(三根山藩)との関係は尤も永く続き、父上の時代に至つてもこれを継続し、これかため廃藩の頃余の家の迷惑となりしものは莫大のものなるよし」(市島春城「北堂夜話」、春城資料・六三九)とある。また春城が父の死と葬儀についてまとめた「慟哭録」には「戊辰の戦争に官軍等か余の家を宿舎とし、(中略)接待やら貸金やらで損た資産も決して少くない」と述べている。こうした幕末の動乱期に蓄積した負債に加え、水害による損失や他家の借財の保証人となったことが、市島宗家に次ぐ規模を誇った角市家の衰退の要因となった。

この帰郷時に春城は負債の全容を確認し、最終的に母と兄弟を母方の実家である丹呉家に残して父と上京、さらに叔父である和泉巖吉の援助を受けることとなった。拙稿「春城市島謙吉、若き日の政治論」〔『日本史攷究』四〇、二〇一六年〕、金子宏二「市島春城自伝資料「憶起録」解題・翻刻」〔『早稲田大学図書館紀要』五八、二〇一一年〕、および金子宏二「市島春城自伝資料「慟哭録」解題・翻刻」〔『早稲田大学図書館紀要』六〇、二〇一三年参照。なお「慟哭録」、「憶起録」については、金子の翻刻に拠りつつ吉田文庫所蔵の原本も参照し、翻刻と原本が異なる場合は原本を優先した。

- (4) 幕末の動乱期、市島家では分家の中に角市家同様に財を失う家が出たため、宗家がその対応に追われることとなった。各家では所蔵する書画類を宗家に引き取ってもらう形で資金提供を受けたこともあったようである。そのことは後年春城が宗家の依頼を受けて所蔵する書画類の鑑定を行った際の以下の記録が参考になる。すなわち、

「元来宗家には贅沢品甚だ少なく、書画骨董のこともきも以来宗家にあるものとしては幾許もなく、多くハ親戚の追々破産せるもの出資を乞ふために宗家へ提出したるもの而已、故に玉石同架なること略々想像したる所也、」〔『双魚堂日載』五一、春城資料、三〇〇〕。

- (5) 春城の「廃嫡願」は一八八七年（明治二〇）九月二十六日付で、父直太郎（次郎吉）と叔父勇五郎との連名で麹町区長宛提出、同年十月十日付で認められている。また東京大学の「退学願」は一八八一年（明治十四）十二月二十四日付で提出、翌年一月十六日付で認められている。いずれも「愧存経歴文書」（春城資料、八九五）参照。

- (6) 退学した春城は「生計上の都合から」三菱蒸汽船会社に入社するも、政治から遠ざかることがつらくすぐに退社している。その経緯については「自叙伝材料録 二 余の政治方面」に詳しい（拙稿「翻刻解題市島春城「自叙伝材料録 二」」、『早稲田大学図書館紀要』六五、二〇一八年）参照。

- (7) 宗家の老人Ⅱ市島宗家七代当主・市島徳次郎（静月、一八二四—一八九二）、当主Ⅲ八代当主・市島徳次郎（湖月、一八四七—一九一七）。幕末の動乱期に会って多くの旧家が没落する中で、静月は見事なかじ取りで市島宗家を近代の大地主へと変化させていった。息子の湖月はそれをさらに発展させ、貴族院議員にもなった。

- (8) 拙稿「翻刻解題 市島春城「自叙伝材料録 三」」〔『早稲田大学図書館紀要』六六、二〇一九年〕参照。

（ふじわら ひでゆき 教育学部非常勤講師）